



今年は何国勢調査年

昭和五十五年——ことしの十月一日には全国いっせいに国勢調査が行われます。そこで今号はみなさんからの協力をいただくため国勢調査に関する、いろいろなお話をまとめてみました。国勢調査は、国内に住んでいるすべての方を対象とした、国の最も基本的で大規模な統計調査です。大正九年「文明国への仲間入り」を合言葉に初めて実施されて以来、五年ごとに行われ、ことしの調査は十三回目に当たります。

なぜ十月一日なのか？

十月一日は何の日でしょうか？赤い羽根共同募金の始まる日法の日新幹線の開業記念日それに、大事なことがもうひとつ、ことしは五年に一度の「国勢調査」の日です。国勢調査は、ことしで十三回目を迎えましたが、大正九年の第一回以来、ずっと十月一日に行われてきました。この大規模な調査を実施するにあたって、一年三百六十五日——ことしは一日多いですが——のうちで十月一日を選んだ

全国で約七十五万人（本町は九十二人）の調査員が四千五百万枚（本町は七千九百枚）の調査票を全世界に配布し、この記入願う——という国をあげての大統計調査によって、人口や世帯数はもちろん、年齢別、配偶者別、産業別、職業別にみた人口構成や世帯構成なども明らかにされます。その結果は、都道府県や市町村にまとめられ、行政をはじめ幅広い分野にわたって活用されます。

理由はなんだったのでしょうか。気候のよい秋だから——いいえ違います。その辺の事情については、大正九年の第一回調査の報告書を見てみましょう。

まず、年末、年始ですが、この時期は「取引の決算、年賀の風習がある」うえ、地域によっては「積雪が深く不適当」。また、夏は「炎熱が激しく、これもまた適さない。残るは春と秋ですが、春は「旅行、遊山する人が多い」ので、調査時期としてふさわしくない。こうしたことから「人々の職業

車はすぐそばに止まらない (人口情性)

「二人で停止」（韓国）
「二人適当、三人せいたく、四人反社会」（シンガポール）
「夫婦は二人、子供も二人」（インド）
いずれも、人口の増加に悩んで出生抑制を呼びかける標語ですが、深刻なお国の事情が伝わってくるようです。ところで、何年もの間、人口が増えもしないし減りもしない、いわば車が止まっているような状態を「静止人口」といっている活動が盛んで、全人口の大半を占める農業従事者にとっては、かならずしも農業従事者ではなく、かつ一年の四分の三を経過した十月一日に決めたということですが、なるほど、とうなずける話ですが、他にもう一説あって、四月から始まる会計年度の中央の日であることから、調査結果は、年度の平均値」として、行政上の利用に便利だからという。



いずれにしても、大正九年以来十三回、毎回十月一日に行われてきたということは、やはりわたしたち国民の暮らしのリズムからいっても、国勢調査の日として「最もふさわしい日」ということなのでしょう。

が、中には子供を産まない夫婦がいたり、子供が親になるまでに死亡する場合もありますので、その分を〇・一人見込んでいます。わが国の場合を見ても、五年ごとに行われている出生力調査により、夫婦一組当たりの子供の数は、次の通りです。
四十二年 一・二二人
四十七年 一・九二人
五十二年 一・八九人
この数字を見る限り、二・一人の「静止水準」を下回っているのが車でいえばバック、つまり人口は減少しているはずですが、実際

1978年7月1日現在世界の人口

人口順位	国名	推計人口(万人)	年平均増加率(%) (1970~1978年)	人口密度(1km ² 当たり)	世界の人口に占める割合(%)
	世界	425,800	2.1	31	100.0
1	中国	93,303	1.5	97	21.9
2	インド	63,839	2.1	194	15.0
3	ソ連	26,157	0.9	12	6.1
4	アメリカ	21,806	0.8	23	5.1
5	インドネシア	14,510	2.5	72	3.4
6	ブラジル	11,540	2.8	14	2.7
7	日本	11,490	1.2	309	2.7
8	パキスタン	8,466	2.8	588	2.0
9	タイ	7,677	3.0	95	1.8
10	ジャマカ	7,222	3.2	78	1.7

資料出所：国連統計月報

(笑い話)

住所不定者の調査は真夜中に

いわゆる「浮浪者」住所不定者の調査には、市や区の職員数を一班とした特別調査班が編成される。調査班は十月一日午前零時の少し前になると、住所不定者が眠るときのみ、現場と定まっている大きな公園や駅の周辺に出動し、警官や鉄道公安官の護衛つきで、いっせいに調査を開始する。

調査が終わると、お札に菓子袋や煙草がプレゼントされる。なかには「酒をくれ」とだだをこねたり、「オレはピースしか喰わない」と気どった人もいた。また、ある時は、市の宿直職員が夜中の二時ごろ起こされ、「オレは駅にいる浮浪者だが、駅のテレビで調査があるというから寝ないで待っていたが、さっぱり来てくれないので、シビレをきらしてオレのほうから来た」という大変協力的な浮浪者がいた。

建物のかげやベンチに新聞紙などをかぶって眠っている人を、一人一人起こして聞き取り調査が始まる。何を調べられるのかと不安な人、寝入りばなを起こされて不気嫌な人、「経済的な余裕だけが人生ではない」と議論をふきかける哲学者や奥さんに子供連れといった「世帯主」もいる。一人一人に協力を「お願いしながら」、「お名前を「生まれた時」は……とたずねていく。なかには、警察官に「今日のところはオレの顔をたてて調査を受けくれよ。」と態度だめられ、しぶしぶ協力する情景も見られる。

このようにして、東の空が白みかけるころには調査班も帰庁し、住所不定者の調査は終わる。不況期には、大都市の地下街などでゴロゴロしている人が増える傾向にある。背広を着てネクタイをぶらさげて眠っているデラックスな浮浪者もいる。ちなみに大阪市の住所不定者の数は、昭和四十五年には三百四十一人であったが、昭和五十年には七百二十七人と倍増している。

八月一日〜七日は

水の週間

もし水がなかったら

水は限りあるもの、水は貴重なもの、皆さんの協力をお願いします。

水は、私たちの生活にとって切り離せない極めて重要なかわりあいを持っています。ところが、「水は空気と同じように天から与えられるもの」、「水は蛇口をひねれば出るもの」といった考えをお持ちではないでしょうか。ともすれば水の恩恵、大切さを忘れがちであるというのも、我が国が世界有数の多雨国であり、水はなにに自由なく使えたとされてきたことにもあります。

しかし、近年生活水準の向上、産業の発展などに伴って水需要は年々増加しており、渇水時には将来水不足が生ずることも予想されます。

その時のためにも水の大切さを知って頂き、皆さんの関心を高めさらに理解を深めて頂くことを目的として、水の日、水の週間が設けられています。

私たちの暮らしに一日たりとも欠かせない水を大切に使いましよう。